

第三百十回 青葉会 初句会

平成二十四年一月二十六日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

石川清 今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 中野一灯 橋口隆

福島正明

伊賀山そらお 小川恭延 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 古田昇

南平和夫 宮内規雄 山崎亜也 山内天牛 渡邊盛雄

赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 村田くに子 山崎青史

山内天牛 山本三恵

《選者吟》

万里子 (忠・隆)

ゴシックは選者の天

初便り辰年同士の親子なり
青空へ尾つぽ振り合ふ寒雀
父に似て下戸の大人に成る今年
友逝きぬ新年会に集ひしに
初雪を放射能ゆる含まざり

全 全 全 全 全

《互選句》

七点 ☆ 柚子の香の湯気放ちけり嬰の四肢

一灯 (万・猛・孤・弘・龍・く・青)

(☆けり↓つ) (青：元氣そうな赤チャンの様子がはつきり見えます)

六点 ☆ 田舎味噌匂ふ自在の干菜汁

全 (万・堅・孤・弘・く・青)

(青：今時自在は珍しい。田舎の雰囲気がよく出ています)

五点 少年老ひ易く故郷の雪達磨

盛雄 (紀・孤・五・弘・正・三)

凧上げや泣く子を置いて親走り

そらお (清・猛・一・く・天)

(父親ではなく祖父||自分の由)

雪晴れや一きわ高き鳥の声

五郎太 (清・猛・忠・一・允)

(☆↓ひときは)

煮凝りや陸奥の港に船戻る

健介 (五・敏・一・隆・青)

(青：上手い句です。煮凝りと陸奥がぴったり)

「金閣寺」の菊之助

四点 雪姫に恋しそうなり初芝居

恵洲 (紀・孤・正・天・三)

☆ 雪明り窓辺で菓數へ飲む

忠彦 (万・弘・一・天)

☆ 生きてるよ独り暮らしの初電話

弘子 (万・猛・忠・敏)

☆ 老いていよよ父母恋し冬銀河

恵洲 (万・五・龍・允)

三点 ☆ 読初の熱き自伝の厚さかな

弘子 (万・孤・龍)

穂高背に雲母(きらら) 光りの樹氷林

一灯 (堅・清・く)

☆ 漁(いさり)り舟焚火明りの浜出づる

全 (万・孤・允)

眼帯を外して見ても冬の空

正明 (五・隆・青)

(青：野田総理も視界不良のようで…)

幻の龍と眼の逢ふ屠蘇の酔

盛雄 (堅・正・三)

「加賀鳶」

二点 威勢よき鳶の名乗りや初芝居

紀久男 (弘・允)

木枯らしの磨きし空は天狼見ゆ

猛 (堅・允)

行儀良き初詣列日本国

忠彦 (弘・龍)

生かされて初日を拝むなるの海

全 (清・允)

初春や地震に一揺れ鶴が岡

五郎太 (忠・三)

大寒や息を整え舞ひ始む

全 (紀・敏)

☆お雑煮は丸角だしはとひとしきり

弘子 (万・青)

(青：雑煮。地方により具も出しも、餅の切り方も違ふ。それぞれがお国自慢をしている様子が見えて楽しい句)

☆初空や酔さめやらぬ露天風呂

堂哉 (万・一)

鯛焼きを二つ求めて初芝居

ゆたか (隆・天)

(季語重なるので、「幕間に鯛焼き二つ求めけり」)

深眠る施設達治の雪積る

一灯 (紀・正)

☆商ひは神に任せて初詣

隆 (万・清)

雪降る夜我家に童心舞ひ降りる

全 (堅・猛)

(選ばなかつたが、よくよく見ると素晴らしい)

生かされてゐる喜びや去年今年

昇 (清・敏)

年ごとに減る煩惱や除夜の鐘

全 (敏・天)

大寒や古新聞の回収日

天牛 (紀・忠)

穏やかな籠に民家山眠る

清 (く)

友笑ふ鍋つきながら古事記談

全 (龍)

薄らと朝の日差しに寒の月

全 (龍)

凍雲を破り街打つジェット音

そらお (一)

(厚木基地)

駅弁買ふ大間の鮪張り込んで

紀久男 (正)

至福なり生牡蠣ワイン啜り呑む

全 (正)

雪催 (ゆきもよひ) 小三治聴き入る立見かな

全 (天)

寒き寺親族集い七回忌

猛 (隆)

☆大寒の一日蟄居す老夫婦

恭延 (万)

赤一つ山茶花残し庭の隅

全 (敏)

威光もて汚染溶かせよ初日の出

健介 (紀)

空襲に始まる記憶寒夕焼け

恵洲 (紀)

年玉や渡して亨(う)くる福(こ)ころ

堂哉 (五)

蠟梅のひと枝手折り年暮るる

ゆたか (堅)

きのふをば去年(こぞ)と呼ぶ習ひやお元日

隆 (紀)

年の瀬に財布失くして生き地獄

全 (紀)

暗闇といふ薄明り初歌舞伎

全 (五)

初鳶や尻を捲つて喧嘩止め

全 (三)

梅蕾希望を運ぶ乳母車

全 (猛)

謀略の真ん中に居る寒卵

全 (紀)

寒紅梅白梅林に先駆けて

和夫 (紀)

手を合はすテレビの上の松飾

規雄 (隆)

小寒に水許さるる歓喜かな

全 (紀)

日めくりは酒屋の年賀世の平和

亜也 (忠)

年一度すなすずしる唱える日

全 (青)

(青：何度唱えても覚えられない七草です。ましてや年に一度では)

タクシーも借りて七福揃へけり

全 (三)

デコポンとは面白き名や蜜柑食ふ

天牛 (く)

●次回青葉会

二月二十三日(木) 午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句

三月二十二日(木)

四月二十六日(木)

平成二十四年一月句会報

○歌舞伎座も中日へなかひすぎたり初句会

先代吉右衛門

一 初句会は万里子先生以下10名出席。投句12名：御病氣、奥様の介護、海外旅行、出張等で欠席者増加。天牛さん恭延さんから御常連が居られませんかといまひとつ元氣が生まれません。先生からの豆乳入り抹茶ケーキ（吉祥寺の茂蔵）、弘子さんからの海老入り煎餅（坂角）、小生の大吟醸「北雪」（佐渡）を賞味しつつ開会。弘子さんの進行役で御覧のように一灯さん、盛雄さん、恵洲さんらが高得点でした。

●回覧（一）正明さん撮影の初芝居総見（演舞場玄関）（二）正明さんの「夏草」第12集（三）盛雄さんの「季流」75号

●話題（一）恭延さん、規雄さんの病状（二）丸紅セーフネット引越（三）霜葉会（伊東政朗さん酒井尚平さんらの絵画）（四）八木書店の作家自筆展示即売会（子規や虚子らの掛軸等）

●庄司さん囲む会：句会始まる前に龍平さん囲んで歓談（正明さん藤倉健次郎さんら）終了後、三幸園で二次会（四名参加）

二 初芝居 総見 正月五日新橋演舞場（昼の部）

○初春やまた改めて芸磨く

先代鴈治郎

○初春や歌舞伎座前の人通り

先代吉右衛門

○降る雪や歌舞伎座も寝てしまひたる

下田実花へじっか

○まゆ玉や人のこころの照りかげり

万太郎

○序幕まだあきしばかりや初芝居

全

今年の東京は演舞場（菊五郎・吉右衛門・三津五郎ら）国立劇場（幸四郎ら）ル・テアトル銀座（玉三郎ら）浅草公会堂（亀治郎ら）平成中村座（勘三郎ら）そして短期間だが前進座も加えることと存じます。恵洲さんの句にありますように菊之助の雪姫が上出来。三津五郎の口跡は吉右衛門に負けておりません。蛇足乍ら関西は恒例となりました大阪松竹座（團十郎・藤十郎・海老蔵）も大入りの由。不入りは劇評も良くなかった国立劇場だけの模様。：（昨年、日経の「私の履歴書」に執筆して好評だった幸四郎は役の解釈が甘く独特の為、歌舞伎のみ不評です）

三 関係者近詠

目覚しの電池を換へる霜の朝

万里子

ゆるやかに雪はおりたる浅間山

允章

今朝咲きし冬薔薇こそ香の高し

全

寒満月暗き漁村の屋根照らす

全

小春日や亡師の句碑へ鳥語繁

全

母となりぬサンタに手紙書きし子が

恵洲

冬霞むベイブリッジに走車光り

全

街道の旧の方なる冬木立

全

冬蜘蛛の糸の糸勁し外人墓地

全

独酌や凧の音聞きながら

規雄

手焙りも猫型大佛次郎なり

全

「NHK俳句」一月号

三村純也選

枯葎や昭和に多き自死作家

全

「NHK俳句」二月号

奥西邦夫

大きな手小さな手バザアの餅係

眞希子

「NHK俳句」二月号

大石悦子選

嫌はるる覚悟の躰石露の花

全

「NHK俳句」二月号

丹野敦雄

短日のおさな子の帰路気遣はる

全

「俳句」二月号

行方克己選

横浜吟行三句

紀久男

「俳句」二月号

青史

英霊に詫ぶる作家の冬帽子

全

「俳句」二月号

青史

文豪の机ちんまり火鉢あり

全

「俳句」二月号

青史

冷まじや原稿ほとんど朱に染まる

全

「俳句」二月号

青史

吉報よ吉報よと触れ小鳥来る

全

「俳句」二月号

青史

小春日やほろほろ溶ける和三盆

全

「俳句」二月号

青史

椎茸のずるりと厚き中華街

全

「俳句」二月号

青史

エレベーター出づれば冬の園開け

全

「俳句」二月号

青史

ピラカンサ誰もが賞める庭の主

全

「俳句」二月号

青史

『萬緑』二月号

和夫

「俳句」二月号

青史

お酌する手のまぶしさよ落葉宿

全

「俳句」二月号

青史

平成二十四年二月十日

紀久男記